



発行日：平成30年11月
編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

◆第38回海部会WGを開催しました！

10月24日（水）に第38回海部会WGを開催しました。

今回は、吉田漁業協同組合の石川組合長のご指導のもと、吉田海岸を参加者で踏査し、アサリの現状について学びました。その後、室内でアサリの捕獲量や生息環境の変化について、意見交換を行いました。



日時：H30年10月24日（水） 11:30～15:00
場所：吉田海岸・西尾市役所吉良支所 第1会議室
参加人数：19名（事務局を含む）

◆主な活動内容

1. アサリの減少と生息環境の変化について 吉田漁業協同組合 石川組合長からの話題提供



- 愛知県水産試験場が公表したアサリの漁獲量（平成18年度以降）の推移をみると、知多では平成28年以降ゼロになりました。そして、最も多く獲れていた西三河でも平成29年時点で88トンにまで落ち込みました。
- 7月に放流した稚貝は11月までは順調に育っていましたが、12月には10分の1に減耗しました。10月に放流した稚貝については、7月の稚貝よりさらに早く減耗しました。水産試験場の調査では、10mmに満たない小さなアサリが、産卵するという事実がわかりました。つまり、産卵後の食べ物が海にないことが予想されます。
- ノリに関する栄養塩調査でリンの値が調べられており、平成25年くらいから右肩下がりとなっています。これは、矢作川浄化センターのリンの処理量（環境基準1ppmのところ0.2、0.3ppm程度の放出）に反比例して減少していることがわかりました。我々は現在の放出量の2倍～3倍の放出量を試験的に実施していただくようお願いし、昨年11月から3月まで放出してもらいました。その結果、感覚的ではありますが光沢や触感の良好なノリが生産できるようになったと感じました。
- 私の地域では、西の風は悪魔の風、南の風は極楽の風といって風向きによる湧昇流によって貧酸素塊の発生が左右されます。今年は複数の台風がこの地域を通過したため、波浪によるかく乱が生じ貧酸素状態が解消しました。
- 今年は長雨や台風の影響により、河川水による低比重の海水が沿岸部にたまりました。その結果、近年にないサイズの貝が三河湾のあちらこちらで確認されています。私は着底稚貝の有無は比重の違いによるものと考えています。
- ぶら下げた籠にはケイ藻が付いており、そこでは貝は生き続けることがわかっています。ケイ藻が貝の生育に必要なことは明らかだと思われるため、今後はその重要性についてデータをとってみたいと考えています。
- アサリの天敵であるカイヤドリウミグモについて、貝の中に生息する個体を経年的に記録しました。その結果、海水温の積算温度が1800℃で1世代のサイクルとなることがわかりました。寄生する貝の種類については、移動性のマテガイ、シオフキガイ、バカガイにも寄生しますが、アサリに匹敵する被害は確認されませんでした。

2. 海部会の9年間のまとめについて



矢作川流域圏懇談会は、平成22年に設立され3年1サイクルで活動を行ってきました。今年は、3サイクル9年という節目の年を迎えました。まとめを考える中で、辻本全体会議座長より、9年間で「できたこと」「できなかったこと」「もう少しでできたこと」を10年目にまとめながら、引き続きいろいろな活動を行ってはどうかのご助言をいただきました。海部会では、現在は「アサリ」を中心に議論を行っていますが、過去には「ごみ・流木」の問題を議論してきた経緯があります。これらすべてを総括できたらと考えています。

3. これまでの懇談会の進捗報告



【第1回合同部会】

8月24日、岡崎市で合同部会が実施されました。矢作川流域に関する科学的な研究成果、特に矢作川の水質について情報共有しました。矢作川の長期的な変化や上下流の問題・課題を改めて認識することができました。

【第1回市民部会】

8月30日、豊田市で市民部会が実施されました。これまで、市民部会として「ごみ・流木」「土砂」「木づかい」の3つのテーマについて議論されましたが、上下流の優れた点や問題点について、形に残してはどうかという意見が出ました。そのため、次回の第2回市民部会では、ワークショップ形式で意見交換を行いたいと考えています。

【矢作川感謝祭2018】

9月2日、豊田市千石公園において矢作川感謝祭が行われました。今回は流域4つの森林組合（恵那・根羽・豊田・岡崎）による出展に加え、東幡豆漁協石川組合長による海の生き物の展示が行われ、大いに盛り上がりしました。



4. 話し合い

◆アサリの減少と生息環境の変化について

- 長期間にわたり目的を持ってデータを取り続けているのは素晴らしい。研究者として尊敬する。(青木)
- 水産試験場と肩を並べるような調査を自前で行う組合長はいないと思う。少なくとも自分にはできない。(石川金)
- カイヤドリウミグモの計測は職員総出で行う。生息個体を水槽で飼育し、ハゼなどの魚類を入れたりしているが、これらを好んで食べる天敵は見つかっていない。(石川甚)
- カイヤドリウミグモは外来種か。(高橋)
- あまり研究をしている人はいないが、種として新しいものではない。しかし、昔からいる種がこのように爆発的に寄生するとは考えにくく、種としては同じであっても、他の地域で生育していたものが、何らかの原因で移入し、爆発的に増えたと考えるのが自然である。(石田)
- カイヤドリウミグモはどのくらいの大きさか。(青木)
- 足を広げると 1.5cm くらいになる。ただ、貝の中に寄生している時は、足を折りたたんでおり 3~4 mm 程度となっている。そのため、一般の人には認識されない。特に色のついた料理ではわからないと思う。(石川甚)
- カイヤドリウミグモの個体数の変動は、どのようなことが要因として考えられるか。(青木)
- アサリに秋に寄生しても、冬に寄生しても成体として貝から独立するのは 4 月であり、いつ寄生しても長い冬の間に大きさがそろってくる。これまでの調査で、カイヤドリウミグモは夏の暑さに弱いのではと感じたのだが、東京湾の事例では、孵化した個体が水温 20℃の条件で 50~60 日 (2 ヶ月程度) 生き続けることがわかった。このことは、我々が 7 月に放流する稚貝にも寄生可能であることを示していた。また、日本有数の広大な干潟域は、カイヤドリウミグモの生息適地であることに加え、移動能力の低いアサリが高密度に分布したことで被害が拡大しているのではないかと考えている。(石川甚)
- カイヤドリウミグモとアサリの共存は可能か。(青木)
- 寄生されたアサリの死骸による水質の汚染が、個体数を激減させる可能性はあるが、現段階でカイヤドリウミグモによって全滅ということはある得ないと考えている。最も大きな要因は海の環境だと考えている。籠の中に小石を入れて稚貝を育てると、良く育つことがわかった。西幡豆においても、小石が投入された海岸では、良好な生育を示した。(石川甚)
- 今年は海水の比重が低い状況が続いているので、アサリの生育が今のところ良好であるという解釈で良いか。(野田)
- 海水の比重が下がるというのは、河川水の影響が広がっているということ。河川の影響が広がるということは、河川からの栄養が直接提供されることを意味しており、河川水が広がって塩分が低下する環境の方が、アサリの着底にとって有利だろうと考えている。(石川甚)
- 三河湾ではアサリも魚も不調である。組合が存続するかどうかは来年次第だと思う。(石川金)

◆海部会の9年間のまとめについて

- 海部会では、はじめは富栄養化、貧酸素問題を扱っていたが、今では貧栄養化の問題を扱うなど 180 度変わってしまった。この間の時間的な流れ、海の変化、海の見方の変化、認識の変化などをまとめてみたら面白いのではないかなと思う。何となく漠然と WG をこなしてきた感じではあるが、継続して実施してきたことに意味があったと感じる。(青木)
- 懇談会員あるいは市民に現状を知ってもらう必要がある。我々だけが知っているても効果的な解決には結びつかない。(石川金)
- 矢作川浄化センターのリンの放出については、漁連が知事に直談判して、急きょ放出が具体化された。ただ、放出量は今までの 3 倍、アサリ 3 万トンぐらいの必要量が放出されたと言われても我々は理解できない。もっと、具体的な解決策を講じてもらいたい。(石川甚)
- 伊勢湾再生海域検討会においても議論されていて、栄養の不足分についても視野に入れたシミュレーションも行おうとしているようだ。そこでは鈴木副座長も委員として参加されているので、強く訴えられているものと思われる。(青木)



今後のスケジュール (予定)

次回の第 39 回海部会 WG は、平成 30 年 12 月 19 日 (水) 西尾市にて開催します。

◆お問合せ◆

矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西 1-6 国土交通省豊橋河川事務所 事業対策官 神本、調査係長 服部

TEL 0532(48)8107/FAX 0532(48)8100

指導員 宇野

*矢作川に関する情報は、矢作川流域圏懇談会メーリングリスト (yahagigawa@iijnet.or.jp) までお送りください。

